
シーフード・ウーマン

樹莉亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シーフード・ウーマン

【Nコード】

N8960I

【作者名】

樹莉亜

【あらすじ】

地球暦4654321234年――

the United of galaxy security council Japan（銀河連盟安全保障協議会日本支部）――略称 U.S.J（ちなみに、某映画会社直営テーマパークとは、一切関係ない事を、ここに明記しておく。）の職員であるジャックは、相棒のニヤントロ星人とともに同僚の家に食事に招かれたのだが……。『暫くサンマは食いたくない』続編。ジャックと異星人たちの普通だけど奇妙な日常。

(初出：2009・4 greeサイト内コミュニティにて、ひね
もすのたり名義で転載)

食卓の中央に山のように積み上げられたそれを目にして、ジャックはやや呆氣に取られた。

焼きたての香ばしい匂いと共に、スパイシーな香りが部屋に充満している。

足元で、猫がくしゃん、とくしゃみをした。

「ナンか」

「匂う？」

レディ・デオ・キシは対面式のキッチンから顔を出して、蠱惑的な微笑みを浮かべ、カレーよ。と、言った。

猫がまた一つ、くしゃんとやって、とことことティッシュを取りに行く。前足で器用に掴んだまでは良かったが、その先が難しいらしい。ジャックを振り仰ぎ、にやあ。と、鳴いた。

「首のファスナーを開けてほしいのにや」

「子供か、お前は」

慣れているのか、猫がしゃべる事にはなんの疑問も持たず、首の後ろの極細ファスナーを開けてやる。

中から黒くてのつぺりとしたニヤントロ星人の顔が出て、どこにあるんだかわからない鼻をかんだ。

「ニヤンコにカレーはいけなかったかしら？」

レディ・デオ・キシは優雅な動きでカレーの皿を二つ、テーブルの上に置いた。東欧風の美しい顔をこちらに向けて、少し残念そうに眉尻を下げる。その体は蛸か烏賊のようにいくつもの触手が伸び、器用にサラダボールと取り皿を並べていた。

ジャックはカレーを目の前に、眉をひそめた。車海老やムール貝の間から、無造作に切られた白いものが、黄色い液体の中に浮いている。

「せっかくシーフードカレーを作ったのに、ニヤンコが食べられない

いのは残念ね」

そう言ってレディは、半透明の体を青紫色に光らせる。感情と連動する体色は、しかしすぐに機嫌よくピンクラメに変わってキラキラと輝いた。

蛸がシーフードカレー作ってやがる。

思わず頭を掠めた言葉を振り払うように、ジャックは首を振った。面倒見が良く穏やかな性格の彼女は、職場でも人気がある。失礼があつてはいけない。

ニャンコが軽やかに椅子に飛び乗り、にゃあ、と鳴く。少しだけジャック達の目線に近付いたニャンコは、暫くあるんだかないんだかわからない鼻でフンフン、と部屋の匂いを嗅いでいた。

「ニャーはラッシーを所望なのにな」

「ラッシーたあ何だ、犬か？」

ジャックの言い様に、レディはころろと笑い声を上げた。

「ラッシーは飲み物よ。ヨーグルトとミルクを混ぜ合わせたものの」

レディはニャンコに向かい、「お砂糖は入れる？」と、優しく聞いた。

ニャンコが嬉しそうに、にゃあ、と鳴くと、どこにあつたのかわからない口が、逆三角形にポツカリと開く。

レディが白い液体の入ったタンブラーを、三本の触手を使って器用に目の前に置くと、ニャンコは早速ナンを一枚とって、ラッシーに浸して食べ始めた。

「んまいにゃ」

ニャンコがそう言うと、レディは機嫌良く、体色を、流れるネオンサインのように光らせる。よかったわ、と微笑み、ジャックにもカレーを勧める。

何気なく差し出された触手の先端がいびつに途切れているのに気付いて、ジャックは息を呑んだ。

「レディ、その手はどうしたんだ？」

何故だか、カレーの中の烏賊様の白い物体が気になる。

彼女は今になって気付いたようで、あら、と驚いた。

痛覚はないのだろうか？

目の前で瞬く間に再生していく触手を見ながら、彼女にとっては大した事ではないのだと覚る。

何故だか、白い物体が気になる。

「ごめんなさいね。もしかしたら、カレーの中に入ったかもしれないわ。切れ端」

「……これ」

ジャックが徐に指さすカレーの中身を見て、レディはああ、それと、頷いた。

「よけておいてね。私、まだ結婚する気はないのよ」
結婚？

話がどこに飛んだのかわからず目が点になっているジャックをよそに、レディはこころと笑い出した。

「もっとも、地球人のあなたには、わからないわよね。こっちのプロポーズの仕方なんて」

「レディの一族は触手の一部をお互いに食べ合うのが結婚の儀式なのじゃ」

ニャンコが横から解説を加える。ジャックは思わず自分の指を押さえた。

見咎めて、レディの体が灰紫色に変わる。

「心配しなくても、地球人の体を食べたりしないわよ。再生できないでしょ？ 不便よね。どうやって愛を語るのかしら？」

「……それは、まあ。言葉で」

ジャックは敢えてレディを見ないよう、やけに慎重に触手の欠片をスプーンで掬って小皿に取り出す。烏賊よりも柔らかそうなそれが、ぷるん、と揺れた。

何故だかジャックは、胃が痛くなって来た。

「ふうん、言葉……だけ？」

レディの触手が、からかうように、スラックスの上から彼の足に触れる。ぞくり、と肌が粟立ち、思わず身を引き腰を浮かすジャックに、ニヤンコが不思議そうに振り返る。

レディは蠱惑的な微笑みを浮かべ、冗談よ。と、言った。

「さあ、遠慮なく食べてちょうだい。沢山作ったのよ」

気を取り直すように、彼女はキラキラとピンク色に光り出す。

しかしジャックはキリキリとした胃の痛みに腹を押さえた。背筋も何だかゾクゾクする。

暫くカレーは食いたくない。

〔終わり〕

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8960i/>

シーフード・ウーマン

2011年9月11日20時38分発行